

衣手に浦の松風さえわびてふきあげの月に千鳥鳴  
くなり (名所千鳥)

足にわづらふ事ありて入りこもりし人のもさに雪ふりし日よみてつかはせ

ふる雪をいかにあはれとながむらん心は思ふとも  
足たたずして

佛名のころをよめる

身につもる罪やいかなる罪ならんけふふる雪と共  
にけななん

戀の歌の中に(三首)

風雅君にこひうらぶれをれば秋風になびくあさぢの露  
ぞけぬべき  
きかでただあらましものを夕づく夜人だのめなる

荻の上風

夕月夜おぼつかなきを雲間よりほのかに見えしそ  
れかあらぬか

待てとしもたのめぬ山も月は出でぬいひしばかり  
の夕暮の空 (寄月待人)

たのめたる人に

待つ宵のふけゆくだにもあるものを月さへあやな  
かたぶきにけり

旅の心を(二首)

玉葉旅衣たもと片しきこよひもや草の枕にわれひとり  
ねん

繪古今たび寝する伊勢の濱荻露ながらむすぶ枕にやどる



月かげ

やらの崎月かげ寒し沖つどり鴨といふ鳥うき寝す  
らしも (旅泊)

世の中は常にもがもな渚こぐあまの小舟の綱手か  
なじも (舟)

相摸川さいふ川あり月さし出でてのち舟にのりてわたるまで

夕月夜さすや川瀬のみなれ棹なれてもうとき波の  
音かな

朝ぼらけ八重の潮路かすみ渡りて空もひみつに見え侍りしかば

空や海海や空とも見ぞわかぬ霞も波もたちみちに  
つつ

箱根の山をうち出でて見れば浪よる小島あり供の者にこの浦の名は知るやと尋

○也良崎、筑前國  
にあり○萬葉、  
十六、沖つどり  
鴨さふ舟のかへ  
りこば也良の崎  
守早く告げこ  
そ。

○上句、一本、雲  
や海波や空さも  
えぞわかぬ。

續後撰  
ねじかば伊豆の海さなん申す答へ侍りしを聞きて  
箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に浪  
のよる見ゆ

二所へ詣でたりし還向に春雨のいたくふれりしかば (二首)

春雨にうちそぼちつつ足曳の山路ゆくらん山人や  
たれ

春雨はいたくなふりそ旅人の道ゆき衣ぬれもこそ  
すれ

同詣下向後朝にさぶらひごも見えざりしかばよめる

旅をゆきしあとの宿守をれをれに私あれや今朝は  
まだこぬ

賀茂社をよめる

○拾遺、神樂歌、  
葵草かづらにかけてちはやぶる賀茂の祭をねるは



しるがれのめぬ  
きの太刀をさげ  
はきて奈良の都  
をれるはたが子  
ぞ。  
○走湯山、伊豆山  
ともいふ、権現  
を祭る。

たが子ぞ

走湯山参詣の時(三首)

わたつ海の中に向ひて出づる湯のいづのお山とう  
べもいひけり

走湯の神とはうべぞいひけらしはやきしるしのあ  
ればなりけり

伊豆の國や山の南に出づる湯のはやきは神のしる  
しなりけり

塔をくみ堂をつくるも人なげき懺悔にまさる功德  
やはある (懺悔歌)

ほのほのみ虚空にみてる阿鼻地獄ゆくへもなしと  
いふもはかなし (思罪業歌)

○初句、一本、ほ  
のほのこ。

○太上天皇、後鳥  
羽院。

太上天皇御書下預時歌(三首)

大君の勅をかしこみ父母に心はわくとも人にいは  
めやも

山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心わがあ  
らめやも

ひんがしの國にわがをれば朝日さすはこやの山の  
かげとなりなき

相州の土屋さいふ所に年九十にあまれる朽法師ありおのづからきたり物がたり  
なごせしついでに身のたちあに堪へすなんなりぬる事をなく申して出でぬ  
時に老さいふ事を人人に仰せてつかうまつらせしついでによみ侍りし(五首)

われいくそ見し世の事を思ひ出づあくるほどなき  
夜の寢覺に

思ひ出てよるはずがらにねをぞ泣くありし昔の世

○第三句、一本、  
思ひ出の。



世の古ごと

なかなかに老いはほれても忘れなでなどか昔をい  
としのぶらむ

道遠し腰はふたへにかがまれり杖にすがりてここ  
までもくる

○結句、一本、弱  
る悲しさ

さりともと思ふものから日を経ては次第次第に弱  
るかなしき

あら磯に浪のよるを見てよめる

○第三句、一本、  
よる波の。

大海の磯もとどろによする波われてくだけてさけ  
て散るかも

○第二句、一本、  
箱根のみうみ、  
下句、一本、ふ  
た國かけて中に  
たゆたふ。

又の年二所へ参りたりし時箱根のみづうみを見てよみ侍る歌

玉くしげ箱根の海はけけれあれやふた山にかけて

何かたゆたふ

まないたさいふ物の上に雁をあらぬさまにしておきたるを見て

あはれなり雲ゐのよそにゆく雁もかかる姿になり  
ぬと思へば

うつせみの世は夢なれや櫻花咲きては散りぬあは  
れいつまで (櫻)

かくてのみありてはかなき世の中をうしとやいは  
んあはれとやいはん (無常を)

うつつとも夢とも知らぬ世にしあればありとてあ  
りと頼むべき身か (無常を)

わび人の世にたちめぐるを見て

とにかくにあればありける世にしあればなしとて



もなき世をもふるかも

二〇〇

日頃やまふすこも聞かざりし人曉ばかりなくなりけるを聞きてよめる  
聞きてしも驚くべきにあらねどもはかなき夢の世  
にこそありけれ

道のほごりに幼き童の母を尋ねていたく泣くをそのあたりの人に尋ねしかば父  
母なん身まかりにしと答へ侍りしを聞きて

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母  
を尋ぬる

○第四句、一本、  
あはれなるか  
な

ものいはぬ四方のけだものすらだにもあはれなる  
かなや親の子をおもふ (慈悲の心を)

建暦元年七月洪水漫天土民愁歎きせん事を思ひて一人奉向本尊聊致祈念と云

時によりすぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめ  
給へ

### 伏見院

御名は熙仁。後深草天皇の皇子。正應元年三月十五日御即位。御在位十  
一年。永仁六年七月二十二日御讓位。その後は院にあつて政を聴かせら  
れ、御剃髪の後伏見殿に居られ、更に持明院に移り給ひ、文保元年九  
月三日崩御。聖壽五十三。花園天皇の正和元年藤原爲兼をして歌集を勅  
撰せしめられた。玉葉集がそれである。

○以下九首、玉葉  
集に出づ。

山の端も消えていくへの夕霞かすめるはては雨に  
なりぬる (春雨)

花よいかに春日うららに世はなりて山の霞に鳥の  
こゑこゑ (待花)

梶枕ひと夜ならぶる友舟もあすのとまりやおのが  
うらうら (旅泊の心を)



よるの雨の音にたぐへる君なれやふりしまされば  
わが戀まさる(雨夜戀)

よもすがら戀ひ泣く袖に月はあれど見し面影はか  
よひしもこず(寄月戀)

あぢきなしありへしすべてうき世かな思ふ心に人  
はかなはず(戀の心を)

いづくにも秋のねざめの夜寒ならば戀しき人も誰  
かこひしき(秋戀)

白雲はゆふべの山におりみだれなかば消えゆく峰  
の松むら

ふけぬるか過ぎゆく宿もしづもりて月の夜みちに  
逢ふ人もなし(夜路)

續千載  
つれなさを月にぞかこつ時鳥まつにむなしき有明  
の空(郭公)

風雅  
月や出づる星の光の變るかな涼しき風のゆふやみ  
の空

新拾遺  
秋風の聞すさまじく吹くなべにふけて身にしむ床  
の月かげ

兼好法師

ト部兼顯の子。吉田に住んでゐた。後宇多院に仕へ、藏人左兵衛尉であつたが、四十歳を越えた頃、出家した。正平五年(觀應元年)四月寂。六十八歳。頓阿、淨辨、慶運と共に當時和歌の四天王と呼ばれた。家集が傳はつてゐるほかに徒然草の著がある。



石山に詣つて曙に逢坂を越えしに

○すべて兼好法師集による。

雲の色にわかれもゆくか逢坂の關路の花のあけぼのの空

法輪にこもりたるころ人のさひきて歸りなんとするに

もろともに聞くだにさびし思ひおけ歸らんあとは峰の松風

ならびの岡に無常所まうけてかたはしに櫻を植ゑさすこと

ちぎりおく花とならびの岡のべにあはれ幾代の春をすぐさん

山里のすまひもやうやう年へぬること

寂しさもならひにけりな山里にとひくる人の厭はるるまで

こぶらふべきことありて都に出でて

立ちかへり都の友ぞとはれける思ひ捨ててもすまぬ山路は

つらくなりゆく人に

今更にかはるちぎりと思ふまではかなく人を頼みけるかな

ゆき暮るる雲路の末に宿なくば都にかへれ春のかりがね（薄暮歸雁）

心にもあらぬやうなることのみあれば

すめばまたうき世なりけりよそながら思ひしままの山里もがな

月宿るせかゐの水の涼しさに遊ぶ今宵ぞとりの鳴



くまで (泉)

人に知られじと思ふ頃ふるさとの横川まで尋ねてきて世の中の事ごもいふい  
ごうるさし

年ふればたづね來ぬ人もなかりけり世のかくれが  
と思ふ山路を

あはれなる夢を見てうち驚きたるに語るべき人もなければ

さめぬれど語るともなきあかつきの夢の涙に袖は  
ぬれつつ

世の中ありともあらず移り變りて馴れ見し人もなくなりゆくことを

語るべき友さへ稀になるままにいとど昔のしのば  
るるかな

月に向ひて思ひつづけ

思ひおくことぞこの世に残りける見ざらんあとの  
秋の夜の月

友だちの來て世のありにくきことなど語るを聞きて

ならひぞと思ひなしてや慰まんわが身ひとつのう  
き世ならねば

春のころ哀傷

かへりこぬわかれをさても歎くかな西にとかつは  
祈るものから

頓阿法師

俗名二階堂貞宗。二十四歳のとき比叡山に入る。歌は二條爲世の門で、  
いはゆる和歌四天王の一人。家集を草庵集といひ、ほかに井蛙抄、水蛙



眼目、愚問賢註、高野日記、十樂庵記などの著がある。文中元年叙。八十  
四歳。

○すべて草庵集に  
よる。

梅の花にほひや空にみちぬらん夜わたる月に春風  
ぞ吹く(夜梅)

涙せくたがならはしにくもるらん霞の袖の春の夜  
の月

初瀬山をのへの鐘のこゑのうちに梢の花の色ぞ明  
けゆく(春曉)

よしさらばくれだにはてね花さそふ風のつらさも  
見えぬばかりに(夕落花)

残るとも見えぬ青葉のこずゑより今もたえだえち  
る櫻かな

いづかたと聞きだにわかで過ぎにけり寢覺の空の  
山ほととぎす(曉郭公)

今更にうしともいはじ世の中にたへてすむ身の秋  
の夕暮

寢覺するわが涙をもさそひけり鹿の音おろす嶺の  
秋風(遠鹿)

誰をまつ宿とも見えぬ淺茅生にくるれば人の衣う  
つなり(夕掃衣)

かきくらしふるかと思れば山のはの時雨をわけて  
夕日さすなり(夕時雨)

夢にだに見えずといかで告げやらん宇津の山路は  
あふ人もなし(遠戀)



山里に松のあらしはなれぬるをまた今更にうきゆ  
ふべかな (山家夕嵐)

宗良親王

後醍醐天皇の皇子。御母は二條爲世の女爲子。かつて天台座主となり、  
尊澄法親王といふ。後、遠江國井伊谷城にこもり、更に出でて諸所に戦  
ひ給ふ。晩年は兵事を捨てて専ら歌道に勵み給ひ、弘和元年十二月三日  
新葉集を撰せられた。家集を李花集といふ。

○すべて李花集に  
よる。

信濃國にて百首歌よみ侍りしに霞を

かすめただいづれ都のさかひとも見ゆべきほどの  
旅の空かは

ある所の花おもしろかりければ暮まで眺めて歸り侍りし殊に名残もおほくてそ  
の花に結びつけ侍りし

めぐりあはば又こん春の花も見よわれや忘るる今  
日の夕暮

日ぐらし花のもこにたたずみてよみ侍りし

忘るるに忘れぬべき身なりせば花にうれへのな  
き世ならまし

あづまに住み侍りしころ月を見て

入るをさへ惜しまでぞ見る夜半の月山のあなたを  
都と思へば

夜もすがら月を見てよみ侍りし

ながむればうき世の中の思ひ出もありけるものを  
山の端の月

山里にかくれる侍りしに



いたづらにながめくらしつ待つ人の來ぬをならひ  
の庭の白雪

人をうらみわびてよみける

わればかりまづ戀死なばこん世にも人を待つ間や  
久しかるべき

延元四年の春にや遠江よりはるばるのぼりて都へまこころざし侍りしも御方の  
いくさ敗れにしかば吉野の行宮にまゐりて暫く侍りしかどもなほ東の方に沙汰  
すべき事ありてまかり下るべきよし仰せられしかばその秋のころ歸りて井伊城  
にてよみける

なれにけり二度きても旅ごろもおなじあづまの峰  
のあらしに

戦場に出で侍りし道すがらいさみあるべき事なごつはものごもにいひふくめ侍  
りしついでに思ひつづけ侍りし

新葉君のため世のため何か惜しからん捨ててかひある

命なりせば

遠國に久しく住み侍りて今は都の手ぶりも忘れはてぬるのみならずひたすら弓  
馬の道にのみたづさはり侍りて征夷將軍の宣旨など賜はりしも我ながら不思議  
におぼえ侍りければ歌よみ侍りしついでに

新葉思ひきや手もふれざりし梓弓おきふしわが身なれ  
んものとは

和歌新選 (中古篇) 終



昭和貳年九月五日印刷  
昭和貳年九月十日發行

【定價壹圓】



有 作

和 歌 新 選

編者	兒山信一
發行者	立川熊次郎 <small>大阪市南區安堂寺橋通三丁目四十五番地</small>
印刷者	北隅茂 <small>大阪市西區阿波路二番丁三番地</small>

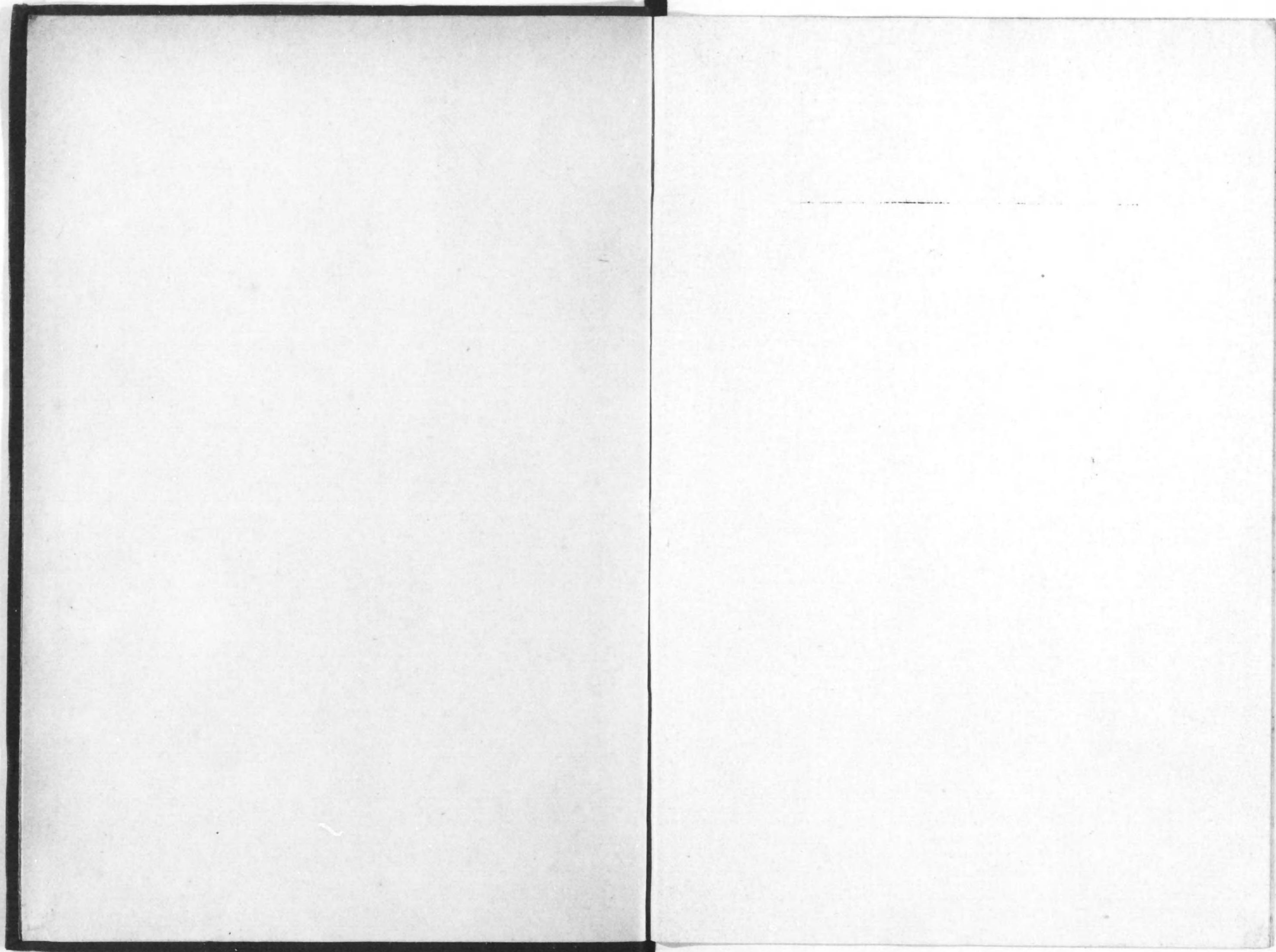
發行所

大阪市南區安堂寺橋  
通三丁目四十五番地

立川書店

電話 大阪一四九四番  
電話 船場一四九四番







終

